

自主課題研究発表（対面）

要旨

第3日目：8月27日（日）

質的研究法を学ぶ 10

絵本を活用した実践研究における質的研究法を考える

企画者（五十音順） 井村礼恵（東京経営短期大学）、荻原彰（京都橘大学）、小堀武信（日本環境教育フォーラム）、須田玲子（早稲田大学大学院）、園田陽一（国際産業技術専門学校）、高橋宏之*（千葉市動物公園）、千原鴻志（山梨県 世界遺産センター）、中川僚子（東京海洋大学）、畑島英史（九州大学大学院）、浜泰一*（フリー）、茂木もも子（東京農業大学）

*企画代表者

キーワード：絵本、実践研究、研究デザイン、主体的な学び、探究学習

SDGs の普及に伴い、幼児から大人まで全ての人を対象とした ESD の推進が一層求められ、環境教育においても、主体的な学びや探求学習の必要性が高まっています。近年、対話的な学習ツールとして、絵本が着目されており、理科教育の分野でも実践研究が報告されています。環境教育において、学習ツールの特性やコミュニケーションのあり方が学習者へ与える影響を把握するためには、どのように研究をデザインしていけばよいのでしょうか。10 回目を迎える「質的研究法を学ぶ」では、絵本を活用した環境教育に焦点をあてていきます。まず、3 名の実践報告をもとに、環境教育の現場で具体的にどのような絵本の活用方法があるのかを見ていきます。その後、適切で効果的な研究を行うためには、どのように研究をデザインしていくべきか、参加者のみなさまと意見交換を深めていきたいと考えています。皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

1. **趣旨説明**（5分） 高橋宏之（千葉市動物公園）
2. **発表**（3名、各10分）
 - ・高橋宏之「動物園における動物絵本の読み聞かせ
～実践研究に向けての意義と課題を巡って～」
 - 実物に会える読み聞かせの実践⇒どのようにしたら「質的研究」に？
 - ・中川僚子「親子で作るマイ絵本が親から子への「教え方・導き方」に与える影響～教育実践研究の方法～」
 - 親から子への影響⇒会話をもとに検討⇒親子で創る「絵本」の意義
 - ・井村礼恵「保育学生の「幼児対象 SDGs 実践研究」過程における意識変容について～絵本の活用を中心として～」
 - 保育学生に幼児対象実践を考えさせる指導法を整理⇒意識変容の検討
3. **グループワーク** ▶ケーススタディをデザインする：実践設計⇒研究へ（30分）
4. **各ルームからの報告**（ふりかえり）（20分）
5. **おわりに**（「質的研究法を学ぶ会」へのお誘い等）（5分）

環境教育・ESD・SDGs と防災・減災・復興

秋吉博之（和歌山信愛大学）・藤岡達也（滋賀大学）・

川真田早苗（北陸学園大学）・萩原彰（京都橘大学）

キーワード:持続可能な社会、気候変動、自然災害、防災・減災・復興、教員養成・研修

SDGs（持続可能な開発目標）では、2030年までに持続可能でより良い世界を目指す世界指標で、環境と調和した科学技術の開発や社会の発展のための目標である。自然や地球環境は、人間に対してさまざまな恵みを与えるだけでなく、時には自然災害という深刻な被害をもたらす。日本は昔から地震や暴風雨に襲われてきましたが、そこから防災・減災そして復興に関する教訓を得てきた。こうした自然災害への対応は持続可能な社会をつくるために必要であり、地球温暖化などの気候変動への対応にもつながる。現在の私たちの生活を維持しながら、世界の人々が未来にわたって地球上で安全に暮らし続けられる「持続可能な社会」を築いていくために、防災・減災、復興を通して、自然や人、そして社会とのつながりを見いだしていくことが必要である。

これらの視点から環境教育、ESD、SDGs と防災・減災・復興の教育の関係性からその現状と課題を論じる。さらに学校現場での防災・減災教育の実践研究を示し、その課題を提示する。次いで教員養成課程における防災・減災教育の指導の方策を探る。

まず藤岡（滋賀大学）からは、グローバルな自然災害に関する防災・減災・復興への取組に期待される SDGs, ESD の理解とこれに沿った行動について論じる。次いで川真田（北陸学園大学）からは、小学校第4学年「雨水の行方と地面の様子」の単元末に位置付けた土石流学習プログラムの開発及び実践例について提示する。さらに萩原（京都橘大学）からは、新規の教育ニーズへの対応を含め、教師教育における河川教育に求められる視点を提起する。

秋吉（和歌山信愛大学）からは、教員養成課程での自然災害や防災・減災に関する教育科目としてのカリキュラムや教材についての課題を論じる。過去に南海トラフ型の地震・津波被害を受け今後も想定される地域において、教員養成課程での防災教育の教材を作成するために、学生の実態を把握することを目的として2022年に調査を行った。この調査から、和歌山及び大阪の学生共に南海トラフ型地震に備え、幅広い防災教育を受けていることが分かった。さらに和歌山では、「稲むらの火の館」見学等、地域の過去の地震や津波に根ざした学習を行っていることが分かった。これを踏まえて、2023年5月に和歌山県下の大学生を対象に調査を実施したので、この結果を報告する。

（本研究の一部は科学研究費 22K02646 の助成によって行った。）

ボードゲームの『Zoonosis ～SFTS ウイルスの戦略～』

体験会

小泉伸夫 小池剛 (かながわ保全医学研究会)

キーワード：SFTS、人獣共通感染症、ワンヘルス、ボードゲーム

本セッションでは、野外でマダニから感染するウイルス病である、SFTS（重症熱性血小板減少症候群）をシミュレーションするボードゲーム、

『Zoonosis ～SFTS ウイルスの戦略～』

の体験プレーを行い、ゲームを楽しみながら、野外活動におけるリスクや「ワンヘルス」を学ぶための、環境教育の教材としての評価をしていただきます。

まず、ゲームマスターによる、本ゲームの目的、趣旨およびプレー方法の説明を行い、続いて、4～8名程度のプレーヤーによるプレー体験を行います。参加人数が多い場合は、複数人で1プレーヤーとさせていただきます。また、見学のための御参加も歓迎いたします。

ゲームは双六形式で、プレーヤーはマダニに寄生した SFTS ウイルスの立場となり、サイコロを振って進み、選択の必要なマス目では、プレーヤーの意思による選択を行います。盤面に書かれたエピソードや選択方法等については、随時、ゲームマスターから説明をいたします。

一定時間経過後、または、一定の獲得ポイントを越えたプレーヤーが出た時点で、ゲーム終了とし、各プレーヤーがどんな経過をたどったのかを全員で振り返り、野外活動中に、どのような経路で SFTS ウイルスが人に感染するのかを確認し、どのようにすれば感染から身を守れるのかを話し合います。

最後に、このゲームの感想や、環境学習、「ワンヘルス」学習の教材としての評価、改善点などの御意見をいただきたいと思います。